

一

次の1～5の――部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

- 1 審判がアウトをセンコクする。
- 2 自分ホニイの考え方だ。
- 3 葉に露がやどる。
- 4 角笛を鳴らす。
- 5 期待に應える。

二

次の問いに答えなさい。

問一

次の――部にあてはまる漢字を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

製造工^テイを確認する。

ア. 低 イ. 定 ウ. 程 エ. 提

問一 次の1、2のグループの中で、上下の二つのことばの関係が異なるものを次のア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | | | | |
|---|-------|---|----|-------|---|----|-------|---|----|-------|---|----|
| 1 | ア. 完全 | ― | 無欠 | イ. 自由 | ― | 自在 | ウ. 自画 | ― | 自賛 | エ. 自給 | ― | 自足 |
| 2 | ア. 発表 | ― | 確定 | イ. 日常 | ― | 通知 | ウ. 可能 | ― | 採用 | エ. 意味 | ― | 常識 |

問二 次の1、2の四字熟語について、間違っている漢字一字を正しく書き改めなさい。

例 短刀直入↓ (解答) 単

- | | |
|---|------|
| 1 | 前代見聞 |
| 2 | 心気一転 |

三

は次のページから始まります。

次の文章は、ア、エの部分の順序が入れかわっています。正しい順序になるように並びかえ、記号で答えなさい。

まず記憶に残る最初の本との出会いは、幼稚園の面接で初めて教室へ入った時でした。そこに、たくさんのお絵かき切れないほどの絵本があったのです。思わず私は、「わーっ」と歓声をあげたい気分になりました。両親がほとんど本を読まない人でしたので、家にある本といえば、父の趣味の『熱帯魚の飼い方』とか、母の『毎日のおかず12ヶ月』とか、家計簿とか、その程度でした。ですから、とにかく本がたくさんあるということだけで、すっかり興奮してしまったのです。ここにあって絵本を全部好きだけ読めるのなら、幼稚園とは何と素晴らしいところだろうと思ひ、何ともいえない幸福感、解放感を味わいました。

ア. 当時、絵本を読んでもらったり、すっかり暗唱して自分で読んだ気になったりしている時、一つ不思議に思うことがありました。今でもよく覚えているのですが、私は『きかんしゃやえもん』で、老いぼれたやえもんが鉄くずにされることになって、駅員さんから「かわいそうだが おまえは もう やくに たたないだよ」と言われるところ、それから『ごんぎつね』で、前に働いた罪の償いのために、栗をこっそり運んであげていたきつねのゴンが、またいたずらをしていると誤解されて、火縄銃で撃たれて死ぬところにお話が差し掛かると、必ず泣いてしまうのです。結局やえもんは博物館に運ばれて、鉄くずにならずに済むとよく知っているのに、「やえもんを助けてあげて」と心の中で叫ぶ。ゴンは死ぬと分かっているが、「撃たないで」と叫ぶ。すると自然に涙が出てきて、土間に淋しく残された、ゴンが取ってきた栗の一山の様子を想像して、たまらなく哀しくなつたのです。

イ. ところがなぜか、泣くことが嫌ではない。弟と喧嘩したり、母親に叱られたり、転んで痛い思いをしたりして泣くのは全部嫌なことなのに、どうして本を読んで泣くのは嫌じゃないのだろう。嫌なところか、泣くと分かっているがに進んでページを開く。さらには、やえもんやゴンのことを散々心配して、同情して、涙を流しても、そのあとちゃんとお腹が空いて、ご飯が食べられる。そのことが、子供心にも不思議だなあと感じていました。「悲しい」というのは辛いという意味だけではない、もっと複雑な感情らしい。そして、本を開くと本の世界へ行つて、閉じるとまたこちらの世界に戻ってこられる。本を開くというのは、あっちに行ったりこっちに帰ったりを自由に繰り返すことなんだ、という読書の感触も、おぼろげながら感じ取っていたように思います。

ウ. それとほぼ同じ頃、同じように私にとって素晴らしい場所となつたのは、歯医者さんの待合室です。『きかんしゃやえもん』、『ごんぎつね』、『ぐりとぐら』、『マッチ売りの少女』、『三年寝太郎』、『白雪姫』……。それから私は岡山に住んでいましたので、当然『桃太郎』もあったと思います。そういう心躍る絵本があったおかげで、歯医者さんに行くのがちつとも苦痛ではなく、いつまでもいたいと思ふくらいでした。

エ. 今浮かんできるのは、歯医者さんの待合室で、『ぐりとぐら』を読んでいる自分です。お行儀悪く床にぺちゃんこ座って、子供用でも大きすぎるスリッパが半分脱げそうになっていて、ソファを机代わりにして絵本を広げている。診察室から歯を削るドリルの音と、子供の泣き声が漏れてくるけれども、私の耳には届いていない。待合室にある石油ストーブの上で、シュンシュン鳴っている薬缶の音だけが、静かに耳の底を流れていて、私は「ぐりとぐらが焼くカステラは何て美味しそうなんだろう、できれば自分も一切れだけでいいから食べてみたいなあ」と、うっとり思っている。何度でも同じページをめくりながら、自分の順番がずっとこなければいいと願っている。それは歯の治療が怖いからじゃない、いつまでもぐりとぐらと一緒に遊んでいたいからなんだ、と誰に向かってでもなく言い訳している。これが、私の最初の読書風景です。

四

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

道ばたにひっそりと咲く雑草の花に、① ときがあるかも知れない。

しかし、野生の植物が花を咲かせるのは、人間に見てもらうためではない。昆虫を呼び寄せて花粉を運ばせるためである。人知れず咲く小さな雑草の花であっても、それは同じである。すべての花は昆虫を呼び寄せるためにあるのである。

美しい花びらや甘い香りも、すべては昆虫にやってきてもらうためのものののだ。そのため、花の色や形にも、すべて合理的な理由がある。花は、何気なく咲いているわけではないのである。

たとえば、春先には黄色い色の花が多く咲くようになる。

黄色い花に、好んでやってくるのはヒラタアブなど小さなアブの仲間である。もちろん、人間には黄色い色に見えても、昆虫に何色に見えているかは、昆虫に聞いてみないとわからない。よく昆虫には紫外線が見えるという話がある。黄色い花は紫外線が少ないので、紫外線が少ないというのが、アブが好む特徴なのかも知れない。

アブは、まだ気温が低い春先に、最初に活動を始める昆虫である。そのため、春先の早い時期に咲く花はアブを呼び寄せるために、黄色い色をしているのである。

もつとも、アブが好むから黄色い花を咲かせるようになったのか、黄色い花が多くなって、アブが黄色を好むようになったのかは、「卵が先か鶏が先か」で、よくわからない。

しかし、春先には黄色い花が咲き、黄色い花にアブが来るという植物と昆虫との約束事ができあがったのである。

ただし、アブをパートナーとするには、問題があった。

ミツバチのようなハナバチの仲間は、同じ種類の花々を飛んで回る。

ところが、アブはあまり頭の良い昆虫ではないので、花の種類を識別するようなことはしない。そして、種類の異なる

さまざまな花を飛び回ってしまうのだ。これは植物にとっては、都合の良いことではない。

同じ黄色い花だからと言って、タンポポの花粉がナノハナに運ばれても、種子はできない。タンポポの花粉は、タンポポに運んでもらわなければならないのである。

それでは、アブに花粉を運んでもらう植物は、どうやってきちんと花粉を運んでもらえば良いのだろうか。

これは難題である。しかし、野に咲く雑草であっても、この難問を解決しているのだから、すごい。

じつは、春先に咲く黄色い花は、集まって咲く性質がある。

集まって咲いていれば、アブは近くに咲いている花を飛んで回る。そうすれば、結果的に同じ種類の花に花粉を運ぶことになるのである。

特に、小さなアブは飛ぶ力がそんなに強くないので、まとまって咲いていれば、近場の花を回ってくれる。

こうして、春先に咲く野の花は、集まって咲く。春に、一面に咲くお花畑ができるのは、そのためなのである。

黄色い花は、アブをパートナーとして花粉を運んでもらっていた。

一方、紫色の花はミツバチなどのハナバチをパートナーに選んでいる。ミツバチは紫色を好む。紫色の花は紫外線も多いから、ハチは紫外線を合図にして紫色を選んでいるのかも知れない。

ミツバチなどのハナバチは、植物にとっては、もつとも望ましいパートナーである。

何より、ミツバチは働きものだ。ミツバチは女王蜂を中心として家族で暮らしている。そのため、自分の餌だけでなく、家族のために花から花へと飛び回り蜜を集めるのだ。④、植物にとっては、それだけ、たくさん花粉を運んでもらえることになる。

さらにハチは頭が良く、同じ種類の花を識別して花粉を運んでくれる。また、ハチは飛翔能力が高いので、遠くまで飛ぶことができる。⑤、ハチが花粉を運んでくれる植物は、離れて咲いていても、しっかりと花粉を運んでもらうこ

とができるのである。

この優秀なパートナーを惹きつけるために、ハチを呼び寄せる花は、たっぷりの蜜を用意してハチを出迎える。ところが、これには問題があった。

蜜をたくさん用意してしまうと、ハチ以外の他の虫も集まってきてしまう。せっかく奮発して用意した蜜を他の虫に奪われてしまうのだ。

⑥ 紫色の花は、どうやってハチだけに蜜を与えることができるのだろうか。

人気のある学校に入るためには、「入学試験」というものがある。

じつは、紫色の花も、蜜を与える昆虫を選ぶための「選抜試験」を行うのである。

紫色の花は、複雑な形をしているのが、特徴である。この複雑な形が、まさに入試問題である。

身近な雑草であるホトケノザの花を観察してみることにしよう。

ホトケノザは、スミレやタンポポほど知られていないかも知れないが、小学校の生活科の教科書でも紹介されるほど、身近に見られる雑草である。

ホトケノザは小さな花だが、よく見ると、なかなか美しい花を咲かせている。

下の花びらには、斑点のような模様がある。これが、蜜のありかを示す「蜜標」と呼ばれるものである。蜜標はガイドマークや、ネクターガイドとも呼ばれている。この蜜標を目印にして、ハチはこの花びらに着陸する。下の花びらはまるでヘリポートのような役割を持っているのだ。ホトケノザは、ミツバチが訪れるのには小さいが、小さなハナバチが訪れる。そして、花びらに着陸すると、ちょうど着陸した飛行機を誘導するラインのように、花の奥に向かって蜜標が続いている。この道しるべに従って、花の奥深くへと進んでいくと、花の一番深いところに蜜があるのである。

横からホトケノザの花を見ると、花の形が細長く、花の中が奥深くになっている。じつは、この狭い中に潜り込んで行って、

後ずさりして出てくるというのが、普通の昆虫は得意ではない。これに対して、ハチは花の奥深くへ潜っていくことを得意としているのである。

蜜標が蜜のありかを示すサインだということが理解できる頭の良さ、そして花の奥へと入っていくことのできる勇気と体力を持った虫だけが、蜜にありつくことができる。

こうしてホトケノザは、知力テストと体力テストによって、パートナーとしてふさわしいハチだけに蜜を与えることに成功しているのである。

ホトケノザだけでなく、紫色をした花は、どれも蜜標や奥に深い構造をしている。

スミレを見てみることにしよう。

スミレも下の花びらに白い模様がある。そして、花の奥深くへと潜り込めるようになっていく。スミレの花を横から見ると、花の奥を長くするために、茎が花の付け根ではなく、真ん中あたりについていて、やじろべえのようにバランスを保っていることがわかるだろう。

もっとも、最初からハチが花に潜るのが得意だったのかは、わからない。ハチだけが潜れるように花は長く進化し、花に潜るように、ハチも進化をしていく。

⑦ ミツバチなどのハナバチの仲間は、頭が良いので、同じ種類の花を回って花粉を運んでくれると紹介した。

しかし、不思議である。

ハチは蜜が欲しいだけで、植物のために働かなければならない義理はない。別に同じ種類の花を回らなくても、近くの花を回れば良いのではないだろうか。ホトケノザの花粉がスミレに運ばれたからといって、ハチには関係のない話だ。

⑧ どうして、ハチは、わざわざ同じ種類の花を回るのだろうか。

学校の入学試験は、毎年毎年、違う問題が出される。

もし、ある学校が昨年とまったく同じ問題を出したとしたら、どうだろう。過去問題さえ勉強しておけば、簡単に問題を解くことができる。そんな学校があるのなら、ぜひ受けてみたいと思うことだろう。

ハチも同じである。

テストをクリアして、蜜にたどりついたハチは、同じ仕組みで蜜を吸うことができる花に行きたくなる。新しい花に行けば、また蜜標を解いていかなければならないし、苦勞して花の奥に潜り込んでも、蜜にありつける保証はない。そうだとすれば、同じ仕組みで蜜が手に入る同じ種類の花に行った方が良いのである。

こうして、ハチは同じ種類の花を回るようになる。そして、首尾よく植物たちに受粉をしていくのである。すべての生物は、自分の得だけのために利己的に行動している。そこには、何の約束もなければ、何の道徳心もない。しかし、結果的に、そんな利己的な行動によって、人間から見ると、自然界の仕組みというのは、本当によくできていると驚かされる。

(稲垣栄洋『雑草はなぜそこに生えているのか』)

⑩

問一 本文には次の文がぬけています。この文が入る直前の八字をぬき出しなさい。

そうして難易度を上げながら、ついには他の昆虫はたどりつけず、ハチだけが蜜を得られるように進化しているのである。こうして植物とハチとは共に進化を遂げてきたのである。

問二 ① に入ることばとして適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 心を尽くす イ. 心に任せる ウ. 心打たれる エ. 心が騒ぐ

問三 ② 「合理的な理由」とありますが、それはどのようなことですか。適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 花が複雑な形をしているのは、すべての昆虫に花粉を運んでもらうためだということ。
イ. 昆虫を呼び寄せて花粉を運んでもらうために、花の色や形にはわけがあるということ。
ウ. 花が甘い香りを放つのは、特定の種類の昆虫を集めて花粉を運ばせるためだということ。
エ. 花粉を運んでもらうために、すべての花には蜜のありかを示すサインがあるということ。

問四 ③ 「アブをパートナーとするには、問題があった」とありますが、花はこの問題をどのように解決しましたか。文中から「～こと」に続く形で六字以上十字以内でぬき出しなさい。

問五

④、

⑤

にあてはまることばの組み合わせとして適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. ④ そのため ⑤ しかし
- イ. ④ むしろ ⑤ ゆえに
- ウ. ④ そして ⑤ なぜなら
- エ. ④ つまり ⑤ そのため

問六

⑥ 「紫色の花は、どうやってハチだけに蜜を与えることができるのだろうか」とありますが、ハチだけに蜜を与えるために紫色の花はどのようなになっていますか。ホトケノザの例から三十字以上四十字以内で具体的に説明しなさい。

問七

⑦ 「しかし、不思議である」とありますが、何を不思議に思っているのですか。適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. ハチが花の蜜をどのように集めるのかということ。
- イ. ハチが蜜を集めるのに同じ種類の花を回ること。
- ウ. ハチが花の種類を見分けることができること。
- エ. ハチが植物の花粉を運ぶために働いていること。

問八

⑧ 「違う問題」とありますが、これは植物の場合には何にあたりますか。文中から五字以内でぬき出しなさい。

問九

⑨ 「首尾よく」の意味として適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. うまいぐあいに
- イ. 偶然に
- ウ. はじめから終わりまで
- エ. 都合にあわせて

問十

⑩

に入る文として適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 植物と昆虫とが、自分よりも相手の繁栄^{はんたい}を考えて、足りない部分を補うようにつながっているのである
- イ. 植物と昆虫とが、自分たちのことだけを考えて、相手には利益のない結びつきになっているのである
- ウ. 植物と昆虫とが、特定の種類だけと結びつくことは、生きる上で不利に働いていると思えるのである
- エ. 植物と昆虫とが、いかにも助け合っているかのような、お互い^{たが}に得になる関係が作られているのである

問十一

本文の内容と同じものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 春になると花粉を運んでくれる昆虫が活発に活動を始めるため、多くの花が一斉^{いっせい}に咲き始める。
- イ. 野原に様々な種類の花が咲くのは、昆虫を多く集めて効率よく花粉を運んでもらうためである。
- ウ. ホトケノザの花びらにとまったハチは、蜜のありかを示す蜜標をたどり花の奥へと進んでいく。
- エ. ハチは頭が良くすべての花の蜜標を理解できるため、一度にたくさんの種類の花の蜜を集める。

五

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

十月に入って、① 夜が長くなった。夏のあいだは六時や七時でも明るかったのに、今では五時に暗くなる。夕焼けが空に溶けて闇がたれこめると、もう一日が終わってしまった気分になるから、久保由佳は週三回の塾へ行くのもゆううつだった。

無論、それでもサボったりはしない。久保由佳の辞書に怠慢の二文字はない。

秋休み四日目のその夜も、家の近所にある教室で、七時半から九時五十分までしっかりと授業に集中した。

「秋の日はつるべ落として、本当だね」

ふっとそんな言葉が口について出たのは、おなじ塾へ通う日向子と一緒に帰り道だ。

「え、なにそれ。つるべ落とし？」

「つるべって、井戸に降ろして水を汲む桶のこと。あれがみるみる井戸の底まで落っこちていくみたいに、秋の日はあつという間に沈んじゃうって意味」

「へーっ、よくそんなおばあちゃんみたいなこと知ってるね。さっすが久保由佳」

いつもながら日向子の反応は上つ調子で、ほめているのか、おちよくっているのかわからない。「さっすが」の意味を測りかねながらも、久保由佳は深く追及しなかった。分かれ道が近づいていたからだ。

「それより、明日、本当によろしくね」

「明日？」

「だから、委員のこと」

「あ……うん、うん、もちろん、どーんと任せといて。ウチの推薦で、絶対、久保由佳を当選させてみせるって」

こぶしで胸を叩いてみせる日向子と別れたあとも、久保由佳は不安をぬぐえなかった。日向子の「絶対」は当てにならない。なんでも大きく言うわりに、実行が伴わないのが彼女の難点だ。

クラスの輪からはみだした者同士でくっついてから半年、久保由佳はすでに半分、日向子に愛想をつかしている。

② と一緒にいるのは、ほかに親しい級友がいない、という理由だけだった。ひとりではみだすのと、ふたりではみだすのではぜんぜんちがうことは、小学校で学んでいる。

「ただいま」

③ 月のない空のさびしさにしんみりしながら帰宅した久保由佳は、玄関のあがりかまちに父親の革靴を見て、どきつとした。こんな時間に帰っているのはひさしぶりだ。

にわかに緊張し、足音をひそめてリビングへ進むと、父親と母親、そして姉の千帆がダイニングテーブルで柿を食べていた。

「お、由佳。帰ったか」

まっさきにふりむき、野太い声を響かせたのは父親だ。

「ま、座れ。おまえたちの学校、明日から後期に入るんだってな。クラス委員長、しつかりがんばれよ。千帆に負けるな」久保由佳はびくつと目を伏せた。

やっぱり、お父さんはおぼえていた――。

先月の末、ひとつ年上の千帆が北見二中の生徒会選挙で副会長に当選した。それまでの書記からのワンランクの昇進。「たいしたもんだ」と気をよくした父親は、その夜、いつもより早く帰宅して祝いのワインを開け、ほろ酔いかげんで久保由佳に迫った。つぎはおまえの番だ、おまえは何をめざすのか、と。その迫りに押された久保由佳は、つい、「後期のクラス委員長」と答えてしまったのだった。

④ のおいしそうな果実も、今は皿に

「友達が推薦してくれるって言うてるけど、候補者がほかにもいる場合は、クラスみんなで投票ってことに……」

「友達が推薦してくれるって言ってるけど、候補者がほかにもいる場合は、クラスのみんなで投票することに……」

「若いうちから集団の長を経験しておくのはいいいことだ。リーダーシップを発揮できる人間と、できない人間とでは、社会に出てから如実に差が出る。候補が何人いようと、しっかり結果を出してきてくれよ」

「ま、クラスのリーダーくらいはね」

父親のとなりで千帆も笑った。

久保由佳には姉のいやみな笑いより、父親の言葉のほうがずきんと来た。

久保由佳の父親は結果が好きだ。大切なのは結果を出すこと。実りを伴わない努力はたんなる自己満足にすぎない。その信条をつらぬいてきたからこそ、今の会社でアルバイトから契約社員へ、そして正社員へとこのほりつめることができるのだと言う。

「いいか、由佳。このご時世、正社員の椅子いすは限られてるし、社会へ出ればごまんと敵がいる。クラス委員長の選挙なんざ、将来の本戦に備えた腕うでだめしだと思っとけ」

「はい」

「どんなライバルがあらわれようと、ひるまずにどんとぶつかってけよ。要は覚悟かくごだ。人間、最後にものを言うのは目力だからな」

「はい」

「オレは目力で勝ってきた。おまえもオレの娘だ。やつてやれないわけがない」

「はい」

「ほら、由佳も、柿」

母親のひとことで、久保由佳はようやく父親の目力から解放された。

母親のひとことで、久保由佳はようやく父親の目力から解放された。

こわばった瞳^{ひとみ}を伏せ、そろりと柿へ手をのばす。よく熟した果肉はフォークの先を吸いこむように受けいれ、口にふくむとすぐにくずれた。⑤ ⑤ なんの味もしなかった。

やっぱり、日向子は口だけだった。

つぎの日、全校生徒が一堂に会した後期始業式のあとで、一年A組では予定通り、席替えと委員決めが行われた。

席替えはくじびきで簡単に決まっても、後期の委員となるとそうもいかない。とくに、クラスをまとめる委員長の出は大事なところだ。

「まずは候補者を決めないとね。誰だれかいませんか。立候補でも、推薦でも」

藤田先生の呼びかけに、まっさきに手をあげたのは敬太郎だった。

「はい。ぼくは、前期の委員長だった小野くんを推薦します。一年A組のクラス委員長は、小野くんしかいないと思います」

ここでヒロファンたちの盛大な拍手が起こったものだから、早くも、日向子はおじけづいてしまったのかもしれない。

その後、真琴まことやこのちゃん、里緒りお、心平しんぺいなどがつぎつぎと推薦されても、日向子はいっこうに手をあげようとしなかった。

チラチラと視線を送る久保由佳のほうを見ようとししない。やつぱり日向子を当てにしたのがバカだった、と後悔こうかいするも、もう遅い。

このままじゃ終われない。候補にさえもならなかったなんて、父親に言えるわけがない。

⑥ をくくり、藤田先生が立候補者をうながすのを待つて、「はいっ」と大きく手を

あげた。

たちまち、教室が波立った。

「げ」

「ひえ」

「久保由佳かよ」

あちこちから悲鳴に近い声があがる。

久保由佳はたじろぐことなく手を掲げつづけた。目力、目力。弱いところを見せたら負けなのだ。

「久保さんのほかに立候補はいない？　じゃ、候補者は六人つてことで、せっかくだからひとりずつ、後期の抱負をスピーチしてもらおうかな」

先生の提案にほかの候補者が「えーっ」とのけぞっても、久保由佳だけは姿勢を乱さなかった。クラスのリーダーを志すのなら、その抱負を表明するのは当然のこと。はなから逃げ腰の五人にはあきれてしまう。

「じゃあ、まずは小野くんから」

ライバル心むきだしの久保由佳に先立ち、まず最初に前期のクラス委員長、ヒロが教壇へ足を進めた。

「えっと、ぼく……前期はいろいろ、うまくできないことも多くて、すみませんでした。もし後期もまた選んでもらえたら、前期にやり残したことに全力でとりくみます。とくに、田町さんがまた一年A組にもどってこられるように、前期よりもつとがんばりたいと思います」

続いて教壇に立った前期の副委員長、真琴のスピーチも似たりよったりだった。

「わたしも前期は反省ばかりです。副委員長として、ぜんぜん役に立てなくてごめんなさい。後期も自信はないんですけど、でも、やっぱり、田町さんのことがあるから……ときどき、小野くんと田町さんちへ行ってるんですけど、少しずつ、

いろいろしゃべってくれるようになってきたから、あともう一歩かなって。もし後期も選んでもらったら、引きつづき、がんばります」

ふたりが田町の家へ通っていた事実を知ったクラスメイトたちから、「へえ」「さすが」と感心の声があがる。

人のよさをまっこうから押しだしてくる、このふたりはやっぱり強敵だ、と久保由佳は改めて思う。しかし、人がいいだけではクラスをまとめていけない。その証拠に、田町の家へどれだけ通ったにせよ、ふたりは⑦を出していない。

「スピーチなんかいいよ。かったりーから、とつとジャンケンで決めようぜ！」

近藤がしきりに騒いでいるのも、クラスの規律が乱れている証拠だろう。

(中略)

今の一年A組に必要なのは、気のいいリーダーではなく、強いリーダーなのだ。

空気が一変したのは、最後の候補者である久保由佳が教壇に立った瞬間だ。

教室のあちこちで尾を引いていた笑いがびたりとやんだ。声だけでなく、みんなの机が沖へと走る小船みたいにすうつと後退していくかのような、そんな錯覚を久保由佳はおぼえた。心平がここに立っていたときには、あんなに、近そうに見えたのに。

いけない、とうつむきがちになる自分を叱る。目力、目力、目力。この程度のことではひるんでいたら、魑魅魍魎が跋扈する世間を渡っていけない。

瞳を力ませ、ひとりひとりをながめまわす。荒波へ挑むがごとく足を踏んぱり、昨夜遅くまでかかって練りあげた言葉を放っていく。

「もしもわたしがクラス委員長になったら、力の限りを尽くして、一年A組を一から立てなおします。前期も生活委員としてできるだけのことはしたつもりですが、やっぱり、生活委員では限界がありました。たとえば、教室をきれいに保つ

のは美化委員の仕事ですけど、前期の美化委員はサボってばかりで、何もしようともしませんでした。わたしが委員長になった晩には、二度とそんなことがないように、まずは各委員の仕事を徹底させます。全員がきちんと自覚をもてば、かならず結果はついてくるはずですよ。今のA組は勉強でも、クラスの風紀でも、一年B組に差をつけられてますけど、まだまだ挽回はできます。二年生になるまでに、自分は一年A組の一員ですと胸を張れるような、そんなA組にわたしはしてみせます。委員長に選んでもらったら、かならず結果は出します」

ハックション！

スピーチを終えた久保由佳の耳に、となりの教室にいる誰かのくしゃみが聞こえた。

ふだんは届かないB組の物音が分厚い壁越しに聞こえるくらい、A組の教室は完全に静まりかえっていた。

「では、開票します。小野裕真……」

無記名で投じられた票の最初の一枚を藤田先生が開いたとき、久保由佳は緊張のあまり指先が震え、心臓はまわりに聞こえそうなほど激しく鳴っていた。けれど二枚、三枚と開票されるにつれて、その鼓動は逆に静まり、頭も急速に冷えてきた。

「矢部真琴、小野裕真、佐野心平、矢部真琴、小野裕真……」

着実に票を重ねていくのはヒロと真琴ばかり。先生は当然という顔でそれを読みあげ、みんなも当然という顔で聞いている。そして久保由佳もまた、心のどこかで、この展開を当然と感じていたのだった。

クラス委員長の選挙なんて、しょせんは人気投票だ。目をそらさずに現実を見れば、「久保由佳」に票が集まるわけがない。

「佐野心平、小野裕真、久保由佳、多岐川里緒、矢部真琴、矢部真琴、松原このみ、久保由佳……」

教室を二度もどよめかせた「久保由佳」票は、日向子と自分自身が投じたものに決まっている。それ以外の誰がわたしに、

と乾いた心で久保由佳は思う。

クラスのみんなから煙たがられているのは承知していた。生活委員としての責任をはたそうとすればするほどとまれ、「クラス委員長でもないのに」「ただか生活委員のくせに」と陰口を叩かれた。生活委員になんかなるんじゃないかと何度か思ったけれど、なったからには最後までやりぬかずにいられないのが久保由佳なのだった。

「松原このみ、小野裕真、佐野心平、小野裕真、矢部真琴、松原このみ……」

⑩ と肌を刺すみんなの視線が痛い。いっこうに名前が呼ばれない自分を、誰もがザマミロとあざわらっている気がする。

秋の日はつるべ落とし。

なぜだか急に、こんなときに、そんな言葉がよみがえった。からからと井戸の底へ落ちていくつるべ。まっさかさまに、急降下。その姿と、今にも足もとからくずれそうな自分が重なる。からから、からから、からから――。

「最後の三票です。佐野心平、小野裕真、久保由佳」

小野裕真 正下 ☆クラス委員長

矢部真琴 正 ☆副委員長

松原このみ 下

多岐川里緒 一

佐野心平 正 ☆書記

久保由佳 下

「長谷川くん、待つて」

帰りのホームルーム終了と同時に、久保由佳はハセカンをつまえた。

「ちよっと残って、話しあわない？」

「は？ なにを」

「後期の方針。美化委員の」

「げ。オレ、これから部活なんすけど」

「十分でいいから。こういうのって最初が肝心でしょう。おなじ美化委員になったからには、協力してもらわなきゃ」

「オレ、ジャンケンで負けただけなんすけど……」

ぶつくさ言いつつも、いざ机をはさんでむきあってみると、ハセカンはそこそこまじめにつきあってくれた。前期、生活委員の仕事を何もしないどころか、みずから率先して風紀を乱していた近藤よりもずっといい。

「で、美化委員って、何すればいいんすか」

「まず第一は、教室をきれいに保つこと。となると、まず最初にやらなきゃいけないのは……」

「イタルの教育か」

「そうね。あと、机や黒板の落書き禁止。ゴミが落ちていたら拾うとか、そういう基本的なことも」

「後ろの壁もなんとかしない？ いろいろ貼りすぎて、ごちゃごちゃしてるし」

居心地悪そうに背をまるめていたハセカンが、そこではじめて顔をあげた。

「あれ、ぜんぶはがして、代わりにミック・ジョーンズのポスターを貼ったらどうかな」

「ミック・ジョーンズ？」

「偉大なるパンクロッカー」

パンクロッカー。最近、前髪をあげて額を出しているハセカンが口にしたそれは、久保由佳の辞書にはないボキャブラリーだった。

「それは、どこのどなた？」

「イギリス人。伝説のバンド、ザ・クラッシュの元メンバーだよ」

「じゃあダメ。教室に芸能人のポスターはご法度でしょう。二宮金次郎とかならないけど」

「二宮金次郎のポスター!？」

室内装飾のセンスは合わなかったものの、後ろの壁を整理することでは意見が一致した。

やると決めたら、すぐにやる。ハセカンが部活へ去ったあと、久保由佳は早速、ひとりで掲示物の撤去作業を開始した。

だいぶ前から貼られたままの水彩画。角のやぶれた地図。中途ハンパに終わった単語暗記グラブのグラフ。とうに

すぎた生徒会選挙のポスター。

無秩序に壁を占めているそれらの画鋏を一個ずつ丁寧にはずしていく。高いところ手をのばすため、教室の後ろのロッカーにもよじのぼった。

教室の人気はとうに失せている。無人の教室をそんな角度から見おろしたのは初めてで、久保由佳はその新鮮な光景を味わうように、二十四の机をゆつくりとながめまわした。

今日、席替えをしたばかりだから、どこに誰がいるのかまだおぼえていない。

でも、どこかにならずいる。「久保由佳」に一票を投じてくれた誰かが。

それを思うと自然と口もとがゆるむ。

最後の最後に読みあげられた、三票目の「久保由佳」票。^⑪あの瞬間に世界の重力が変わった。底へ打ちつけられる直前でつるべが止まった。

久保由佳自身でも、日向子でもない、未知なるもうひとり。頼んでもいない誰かが、わたしに一票をくれた。じわじわと体の内側がぬくもっていくような、このうれしさを胸に抱いて、久保由佳は後期の委員も全力で務めあげようと決めたのだ。たとえクラスの全員から煙たがられても、誰かひとりでも自分のことを認めてくれるのなら、その子のために後期もがんばろう、と。

つるべを救った三票目。たった一票の尊さを、父親はわかってくれるだろうか。この「⑫」を認めてくれるだろうか。

帰宅後のことを考えるとやはり気が重く、ため息まじりに画鋏と格闘していた久保由佳の耳に、そのとき、ふいに日向子の声がした。

「久保由佳、お疲れ」

ふりむくと、戸口の前にばつの悪そうな顔がある。

「手伝おつか？」

うそつき。裏切り者。口だけ女。なじり言葉はいくらでも浮かぶ。

が、それでも日向子は一票をくれた。出所のたしかなその票も、久保由佳にはやはり必要だった。

「ん、お願い」

体をくねらせてわかりやすい恥じらいを見せている日向子に、久保由佳は背中をむけたまま、後ろ手にカモンと手招いてみせた。

（森絵都『クラスメイツ（後期）』）

*魍魎魍魎…山林や沼から生じるといわれる、いろいろな化け物。

*跋扈…悪いものと思っままにのさばること。

問一

この物語を日にちの流れによって二つに分けた場合、後半はどこから始まりますか。そのはじまりにあたる部分の最初の十字を本文からぬき出しなさい。

問二

つ選び、記号で答えなさい。

①	②	④	⑩
にあてはまることばの組み合わせとして適当なものを、次のア～オから一			

- | | | | |
|-----------|--------|--------|--------|
| ア. ① めつきり | ② だらだら | ④ つやつや | ⑩ じりじり |
| イ. ① すっかり | ② ずるずる | ④ ぴかぴか | ⑩ ちくちく |
| ウ. ① すっかり | ② だらだら | ④ ぴかぴか | ⑩ じりじり |
| エ. ① めつきり | ② ずるずる | ④ つやつや | ⑩ じりじり |
| オ. ① めつきり | ② ずるずる | ④ つやつや | ⑩ ちくちく |

問三

③「玄関のあがりかまちに父親の革靴を見て、どきっとした」とありますが、それはなぜですか。その理由として適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 酔っぱらった父から、くどくどと自慢話を聞かされた上、自分の学校生活での足りない点を叱られるかもしれないと考えたから。

イ. 父は、生徒会の副会長に当選した姉と、クラス委員長になりたくても推薦してくれる人がいない自分のことを比較して、自分にプレッシャーをかけると考えたから。

ウ. リーダーシップを発揮できる人間になって欲しいと望む父の願いにこたえる形で、生徒会の副会長に当選した姉からねちねちと嫌味を言われると考えたから。

エ. 努力するだけでなく、その努力に成果が付いてこないと満足しない父から、クラス委員長になることを目標にしたからには、目標を達成するように念を押されると考えたから。

問四

⑤「なんの味もしなかった」とありますが、この表現に込められた由佳の気持ちとして適当ではないものを、次のア～エからすべて選び、記号で答えなさい。

ア. クラス委員長になれるかどうかに自信がないことも父にはうまく伝わらず、とにかく父の強い思いを伝えられたことを重荷に感じている気持ち。

イ. 父の考えに従って、成果を上げている姉を引き合いに出され、自分もクラス委員長になるという成果を出すしか道が残されていないという八方ふさがりな気持ち。

ウ. 父の願いにこたえるためには、もはや自分の感情は捨てて、目標実現のために何も考えずに突き進むしかない、何とか前向きに考えようとする気持ち。

エ. 父の強引な考えには日頃からついていけない母が父の話をわざとさえぎってくれたことで、落ち着きを取り戻すことができる、母に感謝する気持ち。

問五

⑥ にあてはまる体の一部を表す漢字を答えなさい。

問六

⑦ と ⑫ には同じことばがあてはまります。適当なことばを本文からぬき出しなさい。

問七

⑧「みんなの机が沖へと走る小船みたいにすうつと後退していくかのような、そんな錯覚を久保由佳はおぼえた」とありますが、このとき由佳が感じた気持ちとして適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 前期のクラス委員長であるヒロや真琴に対抗できる候補者としては、由佳しかいないとクラスのみんなが考えていることは由佳自身わかっていたので、みんなの期待でその場が張りつめたものになっていると感じている。
- イ. 自分が委員長に立候補したことに対してみんなが驚きを感じ、快く思っていない人がいることもわかっていたが、実際にスピーチするとすると、そんなみんなの気持ちを直接感じて、少し怖気づいている。
- ウ. 自分が委員長に立候補したときには、それをひやかすようなことを言っていたクラスの人たちも、信念を曲げない自分の強さに気付き、素直な気持ちで由佳のスピーチを受け入れようとしてくれることに気がつき安心していている。
- エ. クラスにおいて、今まで由佳が行ってきたことをよく思っていない人たちがたくさんいることに改めて気がついたが、スピーチをする際には絶対に気持ちで負けてはならないと気を引き締めている。

問八

⑨「久保由佳もまた、心のどこかで、この展開を当然と感じていたのだった」とありますが、由佳がどのように考えたのはなぜですか。その理由として適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. クラス委員長の仕事をうまく行っていく上では、何にも増して経験がものを言うので、情熱だけではほかの候補者に絶対に負けないと思っていた由佳も、冷静になつて考えると経験のない自分に票が集まることはないと考えたから。
- イ. クラス委員長の選挙は、クラスをどのようにまとめていくかというやる気よりも、候補者たちに対する人気投票であるので、日頃からみんなに煙たいことばかり言っている自分になんて票が集まることはないと再認識したから。
- ウ. 他の候補者の中にはクラスメイトからの推薦を受けて候補となった者もいるので、推薦者もおらず、自分から立候補しただけで何の後ろ盾もない自分なんか投票してくれる人は少ないことに改めて気がついたから。
- エ. 候補者のスピーチにおいて、前期の美化委員の批判や、隣のクラスとの比較といった前期のクラスの雰囲気^{ふんいき}に否定的な内容を話した自分には誰も味方してくれないという事実によく気がついたから。

問九

⑩「あの瞬間に世界の重力が変わった」とありますが、どのような出来事によって、由佳がどのような気持ちからどのような気持ちに変わりましたか。本文の内容をふまえて具体的に説明しなさい。

問十

この本文において由佳の気持ちは、あるものにたとえて表現されています。適当なものを本文からぬき出しなさい。

問十一 由佳の人物像として適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 何事にも強気で臨み、たとえクラスのみんなと考えが違つて一人になつても、自分の考えを曲げない強さを持った人物。
- イ. できるいい姉や優等生タイプのヒロや真琴に強い対抗心を持っており、その対抗心を源にして、なんとか人をまとめ上げる立場に立ちたいという野望を持った人物。
- ウ. クラスのみんなの前では勝ち気で、主張の強い人物のように振る舞つてゐるが、実際は自分の言動に自信を持ってないところもあり、そんな自分をうまく表現できない不器用な人物。
- エ. 友人である日向子が約束を守ってくれなかったことを根に持つてゐることからわかるように、信頼できる関係を大切にする反面、それを守れない人には冷たすぎる面を持つ人物。

(国語問題終わり)

五					四							三	二	一		受験番号
問十	問九	問六	問三	問一	問十一	問七	問六		問四	問一	↓	問一	4	1	解答欄	
			問四			問八						↓	問二 1			
問十一		問七					20		6		↓	2	5	2		
						問九				問二		問三 1	える	3		
		問八	問五	問二			40	10	こと			2			得点	
						問十			問五	問三				る		
							30									